

杉浦日向子の視点 ～江戸へようこそ③～

杉浦日向子の江戸(1)

江東区深川江戸資料館

漫画家として活躍していた杉浦日向子は、昭和 58 年(1983)頃から、雑誌などに江戸に関する文章を発表し、昭和 61 年(1986)には、初の江戸に関する本『江戸へようこそ』を筑摩書房より出版します。江戸風俗研究家・杉浦日向子のスタートです。

本号から 2 回にわたり、杉浦日向子にとっての江戸、杉浦日向子が伝える江戸について紹介していきます。

1. 杉浦日向子にとっての江戸

杉浦日向子にとっての「江戸」は、自分の生きた時代と地続きのものとしてありました。呉服屋に生まれ、長屋に育ち、相撲・歌舞伎などを観て育った環境が、江戸を調べるのではなく思い出しているという感覚になっていたようです。

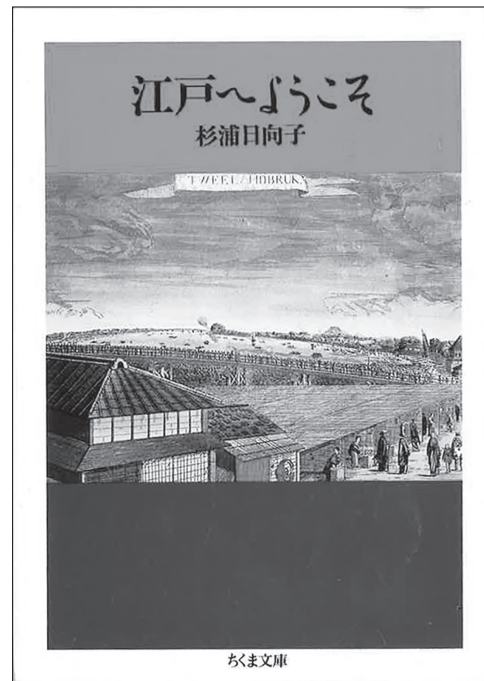
(1) 杉浦のとらえる江戸 ～時代～

杉浦が書きたい「江戸」は、江戸時代と呼ばれる 260 年間の徳川政権下の日本ではなく「江戸時代の江戸という名の都市に起こったさまざまな現象」と言い、それは「おおむね 18 世紀以降、浅間山の大噴火、天明のききん、田沼のワイロ政治とかのころから幕末・明治までの期間」としています。なかでも、8 代将軍徳川吉宗から化政期の 11 代家齊までの時代が、江戸の町が充実しておもしろく、この時期に、歌舞伎・相撲・戯作・浮世絵・落語・歌舞音曲・川柳などの文化が生まれ、それを作り出したのは「民」であり、それは現代まで続くものと言っています。

(2) 杉浦のとらえる江戸 ～場所～

江戸とは「入り江の戸口」つまり内海・湾を抱え込んだようなところにある土地のことと杉浦は説明します。元々は、荒れ野であったところに、街道・水路・緑地などを整備し夢のような都市を作ったのが江戸の都市計画で、幕府の力だけではなく「民」の力に頼って進められたものでした。その結果、江戸の人口は 130 万人となり、パリやロンドンを遥かにしのぐ状況でした。

これらを実現させた背景が戦乱のない泰平の世



『江戸へようこそ』
筑摩書房 昭和 61 年(1986)
ちくま文庫 平成元年(1989)

で、そのキーワードが「持たず」「急がず」の 2 つだと杉浦は言います。「持たず」とは、物を持たない、コンプレックスを持たないということ。「急がず」とは、仕事を急がない、人づきあいを急がないということ。このようにして江戸の人たちは、こころ豊かな時間を過ごしました。

2. 杉浦日向子の江戸学講座

(1) 江戸人とは

①「粋」について

「粋」とは、江戸について語る時には、はずせない言葉です。色々と当て字があり、意気地から「意気」好む風から「好風」、情報に通じている「通」などがあります。「粋」という字を江戸では「イキ」と読み、上方では「スイ」と読みます。「粋」というのは、呼吸の「息」に通じるもの、呼吸は空気を吸い吐いた時に「息」になります。つまり「粋(息)」はお腹がへ

こむ消費する文化。「粋(吸)」はため込む文化といえます。「粋」というのは、その人が発するオーラのようなもの。また、「あの人は粋だったね」というように過去形で語られるものです。一方で、杉浦は「粋について語るほど野暮なことはない」と自戒してもいます。

②ライフスタイル

長屋のライフスタイルは「三ない主義」といって、三つがありません。一つめは、「モノをできるだけ持たない」家財道具は最小限でよいということ。火事の多さとも関係しています。二つめは、「出世をしない」出世して地位が高くなると色々と余計な付き合いも増えるし厄介なことが多い、身軽が良いということ。三つめは、「悩まない」常に前向きにポジティブに生きるということ。こうして、江戸の泰平で暮らしました。また、江戸暮らしのルールとして、「初対面の人に生国は問わない、年齢は聞かない、過去と家族などの来歴は聞かない」などの三つがありました。これは江戸が全国各地から色々な人が集まって住んでいることから生まれたルールでした。

③江戸っ子

時代劇や落語でお馴染みの「江戸っ子」ですが、その実体は意外と知られていません。百万都市江戸の50万人の町人のうち6割は地方出身者、3割が

地元民とのハーフ、1割が地元民ですが、「江戸っ子」の条件「下町育ち」は半数、さらに3代続きとなるとその半数の12,500。つまり江戸の人口のわずか1.25パーセントになります。

「宵越しの銭は持たない」というと気前良く聞こえますが、実は大ざっぱで深く物事を考えないだけのことかもしれません。「江戸っ子の楽天」と言いますが、そこには、あらゆるものを吹っ切ることによって明るい地平に出るといった積極的な絶望があります。

④長屋

江戸の人口120万人のうち約70万人が市街地面積の約80パーセントの武家地・寺社地に住んでいました。残りの50万人の庶民は20パーセントの町人地に住んでいました。

長屋は、高い人口密度に耐え、かつ安い住居費で暮らせるように作られた集合住宅です。九尺二間(2.7m×3.6m)土間付きで四畳半、約3坪のスペースです。こうした劣悪な住居空間で我慢できたのは、お風呂は銭湯に行き、その二階で集まり、寺社の境内で涼んでというように町にバスルームやリビングがあったからです。江戸の人たちは、長屋に住むというより、町に住む。家は寝に帰るところという感覚だったようです。ちなみに深川の長屋は、土地の関係もあり日本橋あたりより広がったと杉浦は言っています。杉浦日向子^{いわ}曰く「せまいながらも楽しい長屋」

⑤火事

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、江戸の町は火事が多く3年に一度は火事があったといわれています。こうした火事の多さが家財道具を持たない生活につながっています。損料屋という今でいうレンタル屋から借りることも多かったのです。江戸の火事は、消すというより延焼を防ぐために建物を壊すという方法、そのため、長屋は壊しやすく建てられました。江戸は職人が多かったので、再建の仕事が増えるということで火事を歓迎していた面もあったようです。

(図版以外の参考資料)

『お江戸風流さんぽ道』

(小学館文庫 平成17年/2005)

講演CD『江戸の粋・京の雅』

(NHKサービスセンター 平成15年/2003)



『一日江戸人』

小学館 平成10年(1998)

新潮文庫 平成17年(2005)